

我流子育て支援論 ～ 学童期 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

桜の季節になると思い出す歌がある。「桜咲いたら一年生～」の歌である。

子どもの入学は、小学校でも中学校でも新しい緊張感があり、不安と期待が綱交ぜになるのが一般的な親の反応であろう。特に小学校は、幼稚園とは違い、勉強をしたり、自分で登下校するなど、成長感を感じられる。しかし、昨日まで、園バスで送迎され、園によっては余り強制されることもなく、自由な空間で遊び中心の生活をしていた子どもたちが、いきなり変わるはずはない。いわゆる小1ギャップの問題である。

学校が始まった直後は給食もないので幼稚園より早く帰宅する。殆どの子が幼稚園や保育所で給食や弁当を経験している中で、学校に慣れるまでは給食が無いというのも、前時代的な感じがしないでもない。保育所でも入学に向け午睡をな

くすなど、適応力を付けさせているのに、何故給食を最初から出さないのかと、保護者の中には不満をもたれる方も多いと思う。しかししばらく経って給食指導が始まったところで、クラスに入ってみると、それはもう戦争状態である。

エプロンやキャップが付けられない、お盆にものに乗せて運べない、じっと座って待てない、こぼす、ひっくり返す、ぶつかる……。給食の配膳が出来て、「いただきます」をするまでに時間がかかりすぎて、食べる時間が足りない。そのため最初はカップなどに入れる量を加減して、少なくしている。それでも大変である。

毎日の指導効果で、1週間、2週間経つ内には、整然と配膳作業が出来るようになってくる。この指導を学校が始まって直ぐ実行するのはやはり難しい。

第一、授業時間の45分間をじっと座ってられる子が少ない。集中力はせいぜい10分、15分。テレビのコマーシャルが入るまでの時間程度しかもたない。先生方も一生懸命工夫して、間に歌を入れたり、体を動かしたり、何とか集中が続くようにしている。それでも、以前に比べ、落ち着いて生活できるようになっているのは、小1ギャップを意識しての取り組みが、幼稚園や保育所でなされているからであろう。

さて、小学校に入って直ぐ問題になるのは、登校しぶりである。母親と一緒に登校できるからというので、一緒に登校するが、結局離れられず、一日中母親にいてもらうケースも結構ある。

このタイプは決して目新しいわけではなく、昔からある。特に小さい弟や妹が家にいて、自分だけが学校に行かなければならない場合や、甘え足りない場合などでは起こりやすい。

しかし最近見られるのは、やけに不安が強く、環境の変化になじめず、小学校入学から2-3年生まで母子分離が出来ないなど、長引くケースである。もちろん発達障がいのある要素も否めないし、実際に診断を受けたケースもある。ただ、発達障がいがある無しよりも、母親の大変さを受け止めながら、少しずつ分離に向けてどのように支援したらよいかの方が大事であろう。

毎日学校に付き添わねばならないことは、下に弟や妹がいる場合など、本当に大変である。仕事も辞めなければならないこともある。母親は最初は頑張るものの、段々疲れてくるし、ちょっと様子が良くなると、もう大丈夫なのではと母親

の方が離れようとして、以前より悪い状態にしてしまったりする。

また、このタイプでは、長期の休みの後など、戻ってしまうことが多く、母親はその度にがっかりしてしまう。

そんな母親の気持ちに共感しつつも、「あと少し」と繋げて行くには、定期的に面接をして、頑張りを認め、小さな変化を共に喜び合うことが必要になる。子どもは着実に変化し、成長していくことを分かっているならば、支援者は、母親の焦りを抑え、どんと構えて、支えることが出来るだろう。

小学校入学後で次に相談が多いのが、友達関係のトラブルである。

友達が出来ない、意地悪される、乱暴だと言われるなど。我が子の発達障がいを疑う親もいる。

初めて子どもを学校に入れた母親は、学校から帰ってきた我が子に「学校どうだった？嫌な事されなかった？意地悪されなかった？」等と矢継ぎ早に質問する。子どもはその都度、何かしら答えなければならない。ちょっとしたことも報告してしまうことになる。大事な我が子のこととなれば、過敏に反応するだろう。それが更にエスカレートして、保護者同士のトラブルになることもある。保護者が心配なのは分かるが、過保護、過干渉の弊害を伝え、聞きすぎないようにすることが大切である。

また、冒頭に挙げた歌の続きに「友達百人できるかな？」という部分があるが、1年生の子が、筆者の所に「ともだち百人できない。」と半ベそで来たことがあった。百人も友達が出来るはずがない。その「友達」の定義は一体何なのか？「2

0世紀少年」の「ともだち」と重なる気持ち悪さを感じてしまうのは筆者だけか？

「ともだち」は数人でできれば十分。クラスの単なる同級生と「ともだち」は違うからと小学校1年生の相談者には伝えたが、こういう細かいことまで伝えていかなければいけない時代なのだ。

乱暴の問題も同様だ。ちょっと小突いただけでも、言語表現の未熟な子どもでは、「突き飛ばされた」となってしまうこともある。わざとぶつかったわけでもなく、「わざとやられたの？」という質問に「うん」と頷いてしまったりもする。勿論、本当に乱暴な子もいるので、よくよく状況を確認しなければいけないが、「乱暴な子」とレッテルを貼られた子は、相手が先にしかけてきても、手を出してしまうために「悪い子」にされてしまい、その悪循環で益々「悪い子化、乱暴な子化」して行くのである。例を挙げてみよう。

先日、クラスの子が「A君がいて、乱暴で怖いから学校に行きたくない。」と言ったからと、「乱暴なA君」が問題児扱いされ、一方的に保護者が責められ、困って相談に来た。

本当に「A君が一方的に乱暴なことをして居る」のだろうか？A君とその保護者の面談をしてみると、確かにA君は言葉での表現が下手で、手が出てしまう子だが、それ以前に、A君にとって嫌なことを言われたり、されたりということがあって、その結果として、手が出たということが多いとわかった。低学年では、周りの子に様子を聞いてもはっきりした状況が確認できることは少ない。したが

って、先生方は、手を出してしまったA君の方が悪いと言うことにしてしまう。事情を上手に説明できないために、上手く説明できる相手の言い分が通ってしまう。そんなことが度々ある様に思う。

こうして、「乱暴者」の烙印を押されたA君は、益々乱暴を働き、保護者は呼び出されたり、電話で報告を受けることが繰り返され、「電話恐怖症」のようになってしまった。更に悪いことに、保護者もA君を叱るようになり、悪い循環に入ってしまったのである。

保護者の関りを叱るより褒めるように変え、ちょっと母子密着型にしてもらい、本児と筆者との話し合いで問題の外在化を図って、本児はあっという間に変わった。集団での問題行動もほとんどなくなったのである。この子には発達障がいがあったが、そんなことは関係ないのである。

この様に、ちょっとした大人の対応で、子どもは大きく変わるということを支援者は知って置くべきである。当たり前なことなのに、大人である支援者や保護者が誤った関わりをしてしまい、困った子を作り上げてしまうことに気をつけねばならない。

小学校で次に問題になるのは、やはり発達障がいの問題であろう。

発達障がいについては、文献も沢山出ているし、研修も繰り返行われているので改めて言うまでもないと思っていたが、未だに、「発達障がいって？」という先生がいらっしやるのには参る。ある生徒指導の先生は発達障がいの子ども達の行動を「甘え」と表現し、「厳しくしつければよい」と怒鳴りつけ、二次障害を起

こしても気付いていなかった。こんな先生は滅多にいない。むしろ、「良くこまめでやってくれる」と感心するような、きめ細かに見てくれる先生が増えてきた。大変だろうが、こうした先生のお蔭で、多くの発達障がいを持った子どもが楽しく学校生活をおくれている。

幼児期から発達障がいの診断を受けている子はともかく、学校に入ってから、発達障がい疑われるようになった場合、保護者にその理解をしてもらうのは一苦労である。そのまま「お子さんには発達障がいの疑いが・・・。」と言おう物なら、一気に「うちの子が馬鹿だって言うんですか？」と攻撃されてしまうだろう。そんなことは言っていないくても、そういう風にとられてしまうことは多い。

そこで、筆者の場合は、まず、子どもの様子を見せてもらったり、担任等から状況を聞いてから、保護者面接を行う。じっくり子どもの家での様子などを保護者から聞き取り、ちょっとでも困っているところが出されるのを、気長に待ったり、或いは学校の先生と連携して、子どもの困った行動を少しずつ保護者に伝えていくことで、困っていただき、「子どもの発達にはバランスの悪さがあることがままある」と説明する。もし、家では困った行動が無いというのであれば、「どういう風に関わったら良いのか教えて欲しい」と言うのも良いだろう。保護者が一番子どものことを理解していると言ってあげることも、保護者のガードを剥ぐには大切である。

関係性がうまく出来たら、最後に、「子どもの全体の様子を確認することで、子どもにどのような支援が必要かを知りた

い」と言うことで、保護者に納得して貰う様にしている。保護者の頑張りや認め、保護者のせいではなく、子ども本人の性格であると言うスタンスで伝えることがミソかもしれない。とにかく、「保護者と仲良くなる」「保護者の味方になる」ことが第一なのである。そうすれば、ずばり言っても関係性は保てる。

時には「父親がそっくりで」などと母親が語ることがある。そういう場合は申し訳ないが、お父さんに悪者になってもらい、「お父さんと関わるの難しくないですか?」「お母さん大変ですねえ」などという、母親とスクラムを組める。

更に虐待問題がある。

学校で多いのは暴力とネグレクトであろう。暴力には言葉の暴力と身体的暴力があるが、身体的暴力については、痣ややけど痕や切り傷などで気がつく。証拠の写真を撮ったり記録を細かく記載するなど、その際の手順は決まっている。保護者が「多少の暴力は躰で、自分も子どもの頃殴られて育った、だから虐待ではない」と主張することも想定内。こちらがいくら「それは虐待」と言っても受け入れてはくれない。そんな時は、「お母さん（お父さん）も叩かれ、虐待されてたんですね、嫌だったでしょう？辛かったですね。」と言うと、比較的こっちのペースに乗せやすい。

虐待通告は義務付けられているので、学校で明らかな身体的虐待が放置される例は少なくなった。しかし、言葉の暴力や心理的虐待、性的虐待については、立証も対応も難しい。慎重に、子どもが語る言葉を積み上げて、記録をとっていくことが通告前に必要であろう。

又、ネグレクトでも、保護者に能力がない場合のネグレクトと意識的なネグレクトは違う。保護者に能力がない場合は、保護者に一つ一つ丁寧に教えていかねばならない。意識的なネグレクトは当然虐待として通告せねばならない。

ただ、まだ日本では、虐待に関するプログラムが十分出来ていないし、法的効力も余りにも弱い。被虐待児をどう支援するか、虐待者をどう再教育するかなど、早急にしっかりした法的効力のあるプログラムを作成する必要があるだろう。それまでは、我々支援者が子どもの立場で、子どもを守るための最大限の努力をするしかない。それには、学校、行政、児童相談所等、関係機関の連携が大事である。情報共有をしながら、子どもをいつ、どの様に保護するか、或いは、保護者に誰が、話をしていくか、早急に且つしっかりと検討し、実行していく必要がある。

虐待については、あちこちでリーフレットが配られ、要保護児童対策連絡協議会などで学ばれているので、此处ではこの程度にしておきたい。

今回最後に書きたい、小学校前半での大きな問題が「ゲーム」である。

ちょっと前はテレビの問題が大きかった。見せっぱなしとか、テレビに子守をさせるとかである。勿論今もこの問題がないわけではないが、それより大きな問題となっているのが「ゲーム」である。

今子ども達の殆どが DS（任天堂で出している携帯型のゲーム機）を持っている。学校から帰ると、公園にゲームを持ち寄って遊ぶ。ゲームを持っていない子は入れない。ゲームを使って通信をし、データを交換するなどしているからであ

る。

そればかりではなく、家でも、Wii や PS など、ゲーム機は多く、小学 1 年生でもゲーム脳になっている子を見かける。姿勢も背中が丸まり、正中線を真っ直ぐ保つことができない。ゲームをするとき以外は、ボーっとしている。ゲームに使う時間を保護者が制限している家も多く、大体が 30 分から 2 時間の範囲であるが、一方で、やりたい放題の家もある。保護者も、子どものことをそっちのけでゲームにのめりこんでいる場合もある。そんな保護者では話にならないが、それでも支援者としては、「保護者がゲームをするときは子どもが居ない時間や寝ている間に」と伝えるべきだろう。

ゲームは、楽しめるように、のめりこむ様に作られている。そのゲームの誘惑に勝つのは並大抵のことではない。相当な意志の強さが要求される。そんな強さを子ども達につけるためには、まずは保護者たちに子どもの声に負けない強さを身に付けて貰わねばならない。

子ども達は、あの手この手で保護者に取り入り、何とかゲームをできる様にしようと頑張る。「お手伝いしたら、ゲーム時間 30 分伸ばして」「テストで 100 点取ったから、今日は 1 時間いいよね？」などなど。子どもも必死だから色々と思いつくし、親の痛いところをついてくる。こういう駆け引きには長けており、「延ばしてくれないなら、もう勉強しないよ」とか「手伝いしない」などと脅して、保護者に何とか OK を出させようとさえする。

小学校低学年の子どもの言いなりになるような保護者では、この先の思春期の

子どもと向き合えない。子どもの言葉に乗せられない様に、ゲーム以外のことにすりかえるしかない。

「鉄は熱いうちに打て」という言葉どおり、低学年のうちにきちんとルールを守らせねばならない。ゲームを与える時点で、ルールを決め、例外を作らないことが大切であり、そのことを、保護者にしっかりと伝えることが支援者の使命だと思う。

次回は小学校後半期の子育て支援について書いてみようと思う。